The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜書評＞Heath Massey, The Origin of Time : Heidegger and Bergson
Author(s)	佐々木, 啓晃
Citation	共生学ジャーナル. 2019, 3, p. 195-201
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/72891
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

書評

Heath Massey
The Origin of Time: Heidegger and Bergson
State University of New York Press、2015、287 頁

佐々木 啓晃*
Hiroaki SASAKI

1. はじめに

本書『時間の起源：ハイデガーとベルクソン』（2015）は、ハイデガーのベルクソン批判を、ベルクソン哲学に基づいて検討し、ベルクソンの時間論＝持続論を再考する試みである。

周知の通り、ハイデガー（1889-1976）とベルクソン（1859-1941）は 20 世紀を代表する哲学者である。しかし、両者に対する評価は明確に異なる。一般的に、ハイデガー哲学が今なお現代哲学の議論の中心となるのに対し、ベルクソン哲学はもはや過去の思想とみなされていると著者はいう (1)。なぜベルクソン哲学が過去の思想と評価されるようになったのか。その要因の一つに、ハイデガーによるベルクソン批判を挙げることができるだろう。なぜなら、現代哲学はハイデガーの決定的な影響の下にあるからである。とくにフランスではその影響が顕著である。本書は、ベルクソンの議論を詳細に追うことによって、ハイデガーによるベルクソン批判の妥当性を問うものであり、ベルクソンを再評価する一助となるだろう。

著者のヒース・マシーは、ベロイト大学（米）の哲学および宗教学の准教授であり、主に 20 世紀の大陸哲学を中心に研究している。

本書は、5 つの章および序論と結論で構成されている。以下に各章の概要を示す。

第 1 章では、初期ハイデガーの著作に着目し、そこからベルクソンに対する両義的な評価を抽出する。ハイデガーは、根源的に時間を再考しようと努めたベルクソンを評価する一方で、その時間論＝持続がアリストテレスの思想に依拠していることを批判する。

第 2 章では、ベルクソンの第一の主著『時間と自由』(1889) に基づいて、

*大阪大学大学院 人間科学研究科 共生の人間学 博士前期課程；u631449g@ecs.osaka-u.ac.jp

ハイデガーのベルクソン批判に応える。『時間と自由』から明らかになることは、ハイデガーが持続を過度に単純化していること、そしてベルクソンが依拠しているのはアリストテレスではなくカントであるということ、この二点である。

第 3 章では、ハイデガー『存在と時間』（1927）におけるベルクソン批判と、その批判に基づくハイデガーの時間論＝時間性の議論を確認する。しかし、そこで明らかになるのは、ハイデガーの時間性の解釈がベルクソン哲学に立脚していることである。つまり、ベルクソンが『時間と自由』の中で持続を論じたのと同じ仕方で、ハイデガーは時間性を空間から区別し、時間性に基づいて自我（本来性あるいは非本来性）を論じるのである。

第 4 章では、ハイデガー『現象学の根本問題』（1927）の中でさらに展開されるベルクソン批判が取り上げられる。しかし、その批判の根拠となるハイデガーのアリストテレス解釈もまた、ベルクソン哲学に立脚していると著者は指摘する。ハイデガーはアリストテレスを選択的に読解し、その時間論を脱空間化しているが、これは『時間と自由』における時間＝持続と空間の区別を想起させる。

第 5 章では、ベルクソンの第二の主著である『物質と記憶』（1896）に基づいて、ハイデガーのベルクソン批判に応える。ハイデガーは、ベルクソンが存在の問いを無視しているとして批判する。しかし実際は、ベルクソンは『物質と記憶』の中で存在論を展開している。そこでは、意識の存在と現在の特権性が改めて問われることとなる。

本論では、ハイデガーのベルクソン批判と、それに対する『時間と自由』あるいは『物質と記憶』からの反論について、そのエッセンスだけを抽出して提示する。

2. ハイデガーのベルクソン批判

ハイデガーはベルクソンの時間論を「時間は空間である」、「持続は質的継起である」と定式化する。そして、それに対するハイデガーのベルクソン批判は、次の四つに大別することができる。すなわち、①ベルクソンの持続はアリストテレスの思想に依拠している、②ベルクソンはアリストテレスの

思想を誤って理解している、③ベルクソンは存在の問いを無視し、無前提に持続を意識＝主観に帰している、④ベルクソンは「今」を特権視している。以下、その詳細を順に追っていく。

①ベルクソンにとって、我々が日頃使用している時間は、空間化された時間である。たとえば、時計はその針が空間内を移動した距離と位置によって時間を表す。このように空間を媒介して時間を表象することで、時間は抽象化され、共通の尺度となりうるのである。

それに対して、ベルクソンが主張する時間＝持続は、決して空間化されない時間である。したがって、持続は空間化された時間から明確に区別されるのだが、その際ベルクソンが用いるのが「量」と「質」のカテゴリーである。すなわち、ベルクソンは時間を「量的な時間」と「質的な時間」の二つに分け、後者こそが根源的な時間であると主張したのである。

ハイデガーは、この区別にアリストテレスの影を見る。なぜなら、「量」と「質」というカテゴリーは、アリストテレスに由来するからである。たしかに、アリストテレスが時間を運動の数と規定したのに対し、ベルクソンは時間を質的な継起と規定し、それを持続と呼んだ。しかし、それはアリストテレスのカテゴリーの中で、アリストテレスの規定を反転させただけにすぎない。したがって、持続は伝統的な時間概念を超克できていない[(2)]。

②また、ハイデガーは、ベルクソンがアリストテレスの時間概念に対する「反対－概念」として持続を論じただけでなく、ベルクソンがアリストテレスを誤って理解していることを批判する。

ベルクソンによると、アリストテレスは時間を空間に還元している。そして、そこから「時間は空間である」というベルクソンの根本前提が生じる。しかし、ハイデガーは『現象学の根本問題』の中で、アリストテレスの時間論にこそ根源的な時間性の脱自的－地平的構造を見出す[(3)]。ベルクソンはアリストテレスを誤って理解したがゆえに、伝統的な時間概念に縛られてしまい、根源的な時間を見出すことに失敗した。

③ベルクソンは『時間と自由』の中で、無前提に持続を意識＝主観に還元している。換言すると、質的な継起である持続は、我々の主観的な時間経験であるとされる。そのため、持続は人間経験に制約されている。しかし、まずもって問われるべきは存在であり、主観－客観の区別以前の根源的な時間＝時間性である。ハイデガーは、アリストテレスやベルクソンを超えて、

「時間意識」を問題にする。

④アリストテレス以来、時間は「今」を基点に理解されてきた。ベルクソンもまた、その例外ではない。ベルクソンは持続を「継起」として捉えているが、まさにそのことによって「今」に捕らわれていることが明らかとなる。なぜなら、字義通り過去を過ぎ去った「今」、未来を未だ来ない「今」と捉えることによってはじめて、時間は「今」の連続として「継起」すると言われるからである。

根源的な時間＝時間性においては、過去・現在・未来は切り離されておらず、それは「既在しつつある現在化する将来」として、おのずから「時間化」する。

3. 『時間と自由』からの反論

著者は、『時間と自由』に基づいて、主に①と②の批判に反論する。

①ハイデガーはベルクソン哲学を過度に単純化している。たしかに、ベルクソンは「量」と「質」に基づいて持続を空間から区別する。しかし、その区別は、持続の一局面でしかない。持続には他にも「異質的多様性」や「有機的組織化」あるいは「相互浸透」といった特性があるが、ハイデガーはそれらについては何も語っていない。

②また、「時間は空間である」という規定は、正確には「等質的媒体としての時間は空間的表象である」となる。ハイデガーの言うとおり、ベルクソンの数の分析が、時間が数えられる量であるという考えに抗してなされていることは正しい。しかし、そのことからベルクソンがアリストテレスに依拠していると批判するのは性急すぎる。『時間と自由』の結論を見れば明らかなように、そもそもベルクソンが数えられる量として理解している時間は、カント『純粋理性批判』「超越論的感性論」に出てくる、等質的媒体としての直線的時間である[(4)]。

したがって、ベルクソンがアリストテレスに依拠しているかどうかは不明瞭であり、そのため、仮にベルクソンがアリストテレスを誤って理解しているとしても、そのことによってベルクソンが伝統的な時間概念を超克できていないと批判することはできない。そして、ベルクソンが依拠している

哲学者を強いて挙げるなら、それはカントである。

4. 『物質と記憶』からの反論

残る③と④の反論は、『物質と記憶』に基づいてなされる。

③たしかに『時間と自由』では、持続と空間のデカルト的二元論が維持され、持続は意識＝主観に帰されていた。しかし、ベルクソンは記憶の研究によって、持続を存在論的に再考する。それによって明らかになることは、持続には様々な緊張の度合い（弛緩と収縮）があるということであり、持続は人間の意識を超えているということである。つまり、持続は心理学的なものではなく存在論的なものであって、持続は意識に帰するものではなく、持続によってはじめて意識が生じるのである。

④また、ベルクソンは記憶の研究によって、過去の存在についても言及する。ベルクソンによれば、過去は「もはや存在しない」ものではない。それは有用であることをやめただけであって、機会があれば想起として意識に再び現れる。換言すると、過去はつねにすでに潜勢的にそれ自体として存在している。また、現在の知覚はつねにすでに記憶に覆われている。したがって、純粋な点としての「今」は、権利上は考えられうるが、実際は過去と密接に関連しているのである。

5. おわりに

本書によって、ハイデガーによるベルクソン批判は、主に『時間と自由』で展開された持続論に基づいており、極めて一面的なものであることが理解されうる。ベルクソンは『物質と記憶』において、持続論を発展させており、それは十分にハイデガーの批判に応えうるものである。したがって、ベルクソンもまた時間を根源的に（少なくともハイデガーが批判する以上に）理解していると言えるだろう。

しかし、議論が少し粗いことは否めない。著者は結論で、ハイデガーを念頭に置き、ベルクソンの持続を「脱自的持続」と呼ぶ。たしかに持続は、他のあらゆる持続に開かれている。しかし、ハイデガーの時間が現存在に依っ

ているのに対し、ベルクソンの時間はイマージュの総体＝宇宙に依っており、いわば非人称である。現存在とイマージュの差異に触れることなく持続を脱自と同一視することは、性急に過ぎると言わざるをえないだろう。また、本書はハイデガーとベルクソンを時間の観点から比較しただけであり、そこから積極的な主張が引き出されているわけではない。時間の起源に関する問いは依然として残されたままである。

とは言え、本書はハイデガーのベルクソン批判の要点を簡潔にまとめ、それに対する反論を提示している稀有な研究書であり、ベルクソンを再評価するうえで、今後のベルクソン研究に寄与するものである。

注

(1) しかし、これは著者の哲学史理解にすぎない。近年ではベルクソンの再評価が進んでおり、その一例に『ベルクソン『物質と記憶』を解剖する』（書肆心水 2016）や『ベルクソン『物質と記憶』を診断する』（書肆心水 2017）を挙げることができる。

(2) ハイデガーによると、『時間と自由』と同時に、その副論文として『アリストテレスの場所論』（1889）が書かれたことも、ベルクソンがアリストテレスに依拠していた根拠の一つであるという。これに対して著者は、これら二つの著作の連関は、ハイデガーが述べるほどには明確ではないという。なぜなら、『時間と自由』の中には、アリストテレスに関する言及が一回しか出てこないうえに、その一回は時間とは関係がないからであるという。しかし、『存在と時間』の註を読む限り、ハイデガーは文献的かつ表面的な連関によって、ベルクソンがアリストテレスに依拠していると述べているわけでは決してなく、そのため著者の反論が適切であるとは言い難い。

(3) しかし著者は、ハイデガーのアリストテレス解釈に、ベルクソンが寄与しているという。なぜなら、ハイデガーはアリストテレスを選択的に読解し、その時間論を脱－空間化するからである。そのことによって、ハイデガーはアリストレスが根源的な時間を隠蔽すると同時にそれを見出していたと主張するが、仮にそうであるならば、アリストテレスに依拠するベルクソンもまた、根源的な時間を見出すことが可能である、というのが著者の主張である。ハイデガーは意図せずして、アリストテレスの時間論をベルクソニズムにしていると言える。

(4) もちろん、カントの時間論がアリストテレスのそれを超克していない限り、ベルクソンもまたアリストテレスを超克できていないことになる。しかし、そうであるならば、ハイデガーはベルクソンのカント批判とアリストテレスの連関を示さなければならないというのが著者の主張である。

参照文献

H. Bergson, *Essai sur les données immédiates de la conscience*, PUF, 1889, rééd. « Quadrige », 2013

——, *Matiére et mémoire*, PUF, 1889, rééd. « Quadrige », 2012

ハイデガー, M『存在と時間』熊野純彦訳、岩波書店、2013

——『現象学の根本問題』木田元・平田裕之・迫田健一訳、作品社、2010